

## 前回までの主な意見

※「・」は第1・2回検討委員会での意見

「○」は第3回検討委員会での意見

### 1 教育の目標

- ・ ふるさとを愛する気持ちを養うということが人間形成の一番の根源。ここに住んでよかったという土台を作って世界に羽ばたかせる、そういう方向性で子どもたちを育てていくことが必要である。
  - ・ 都会の子どもは最初から世界を見つめているが、高知や地方の子どもは、東京・大阪を目指し、最初から目指すところが違っている。高知の子どもも世界に目を向けるような教育が大事である。
  - ・ 10年後学ぶことの楽しさを共有する教育的風土を高知県に作っていくことを目標に、学ぶことは楽しいという高知県にどうしたらなるのか考えていきたい。学ぶことが手段ではなく、目標となってもよいのではないか。
  - ・ どのような時代になろうとも乗り切っていける力の基礎を義務教育段階で身に付けさせるという覚悟が出发点。それは学力、体力、社会性、道徳性等であり、教えて繰り返し実践させるという指導と自らの活動の中で自然と体得する両者の適切なバランスの中で身に付くものである。
  - ・ 良き高知県人を高校まで育てても、県外へ行く。高知県という枠にとらわれずに日本人を育てる、世界人を育てるというグローバルな視点をどう考えていくか。
  - ・ 学力を向上させることと、社会性を身につけさせることの2つを目標にしたらどうか。社会性の向上を第一に取り組みれば、時間はかかるかもしれないが全体の学力も向上するのではないか。
  - ・ 子どもたちの未来を守り育てるために、大人自身の生き方も見直し、教育をみんなが自分のこととして考えていけるよう、高知県の風土的なものを変えていかなければならない。
  - ・ 「あなたがこの世に生まれてきたことは素晴らしいこと。周りのみんなに手伝ってもらい、できることを探そう、できることを増やそう」ということが特別支援教育の基礎であるが、教育の基本もそこにあるのではないか。
- それぞれの年齢、時期が来たとき、一人ひとりが自分の力を発揮できる、そういった子どもたちを育てていくことがこの計画の目指しているところではないか。
- 「学ぶ喜び」「できる喜び」を感じ取る教育が、生涯教育や学習の基本。

### 2 一人ひとりの発達段階に応じた教育の充実

<指導・支援について>

- ・ 自発的に考える力、創造する力、ものをつくる力、自発的にできる力を育てることが大切である。
- ・ 人を変えるには、空気を変えるしかない。子どもたちをどう変え、学校をどう変えていくかという思いがあれば空気は変わる。
- ・ 学校教育の担うべき役割は、学力形成と人間形成。教員が何を思って人間形成しているのか、児童理解とは何かを考えるべきである。

- ・ 教員と生徒との関係を見直し、礼節を教え、あいさつのできる子どもを育てる必要がある。
- ・ 勉強でもスポーツでも、その教科やスポーツを好きにさせる工夫・アドバイスをすることで、生徒を将来大きく伸ばせるのではないか。
- ・ 教員という専門職として、子どもたち一人ひとりの能力、到達目標をどのように作り、キャリアパスを構築していくかが大切である。
- ・ 基礎基本をしっかり身につけた子どもを育成していかないと、学力は定着しない。基礎基本を徹底していく必要がある。
- ・ 教員が教育のプロとしての力量をどう高めていくか。また、学校がプロ集団としてどう責任を果たしていくかが求められている。

#### <授業等について>

- ・ 中学校で学力が下がるのは、小学校で自学力がついてないことが大きいと思う。自学力をつけるような授業づくりに力を入れていかなければならないし、そのことが優れた授業づくりにもつながる。
- ・ 小学校では高学年になると「できることをする」宿題となり、自宅学習や自学自習が出来る子と出来ない子で学力の差が著しくなる。日々の宿題、毎日の積み重ねが大切と感じた。また、長期休暇は、習熟できていないものをさせたり、自分で考えてできることをさせる宿題がいいと思う。
- ・ 高校や中学校で職場体験や職場体験学習の機会を増やすなど一層キャリア教育に取り組んでいけば、県内就職率のアップにもつながるのではないか。
- ・ 秋田県は、家庭学習と授業がセットになっているし、そこには学びのサイクルがある。そういうものがないと家庭学習は強いられているということになる。

#### <就学前>

- ・ 高知県の子どもに学力をつけていくためには、幼稚園教員、保育士をどう変えていくか、その意識が変わらないと子どもは変わらない。
  - ・ 保育サービスが充実すると、子どもを預けやすくなり、保護者は働きやすくなる。一方で、子どもたちが置き去りにされないよう、親とつないでいく方法を考えていかなければならない。
  - ・ 高知の乳幼児をどう育てていくのか、乳幼児期のビジョンを知事部局と教育委員会で連携して明らかにすべき。そのことが「親育ち」にもつながり、親子ともども成長にもつながる。
- 学びたいと思った時に、学べる子どもになっていること。そのための基礎学力をつけていくことが大切。学力をつけるために就学前の子どもたちに、何を育てないといけないのか。人とつながる力をどう育てるのか。人とのつながりの中で自分を見つめられる子どもに育てること。様々なことを乗り越える力を育てることが必要である。

#### <特別支援>

- ・ 軽度発達障害も含め特別な支援が必要な子どもたちには、乳幼児期から支援計画を策定し、医療・福祉・教育が連携してサポートするシステムができないか。

- ・ 高校では、特別支援教育への知識や対応がまだまだ十分ではないし、理解もされていないと感じる。特別な支援が必要な生徒が高校に進学した時、生徒にどのように対応していくのか、知識の習得も含め論議する必要がある。

#### <その他>

- 子どもたちを救うために、教育委員会のネットワークをうまく働かせる必要がある。

#### <高等学校の在り方>

- 一つの指標として、例えば、高知県全体で東大に何人入るか、それがどう推移したかという視点で考えていくのも一つの方法。
- 医学部の教員が、大学医学部での6年間で、医師としての適正をつくることは極めて難しい。医師としての資質を持った学生を選ばなければ間に合わないと言っている。そういう意味では、小中高大において、学力の問題だけでなく、人間的な力、生きる力を学校レベルでどう育ててつなぐのかも必要。将来を託する子どもたちにとって高校教育は中途半端になっている。

#### <大学の在り方>

- 高知県では、大学と地域、小中高の連携が十分でない。
- 大学は、学生を受け入れるだけの機関ではなく、地域において営まれる高等教育機関であり、教育や研究、地域との連携など様々な役割を担っている。
- 大学は知恵が集積するところ。他県、他国から来た学生は、高知で知恵をもらい、高知の地域性、高知が必要としているものは何かを学んでいく。
- 大学では大学生を育てているが、地域の人と共に育てている。
- 大学は、学校や地域と連携し、地域の教育の手助けをしてくれるようになると、活用したい学校や、救われる子どもたちが多と思う。

### 3 豊かな心と健やかな体の育成

- ・ 体力・持久力がないと、集中力も持続しない。学力も同様で、学力を向上させるためには、持続して学習することが必要であり、規則正しい生活習慣を身につけていけば、学習時間も増やすことができる。ただ、強い意志と体力がなければ生活リズムは身につかない。
- ・ 健康な心と体をつくるためには、基本的な生活習慣と生活リズムを大切にすること、人とのつながりや実体験を通じて自己肯定感や自尊心を持てる子どもに育てること、大人自身が生活を見直し、便利さだけに流されない生活をする必要がある。
- 体力はとても大切。体力がなければ継続する力もない。そういう視点も必要である。

### 4 連携の強化

- ・ それぞれの教育機関で、その課程を修了するまでに、その発達段階に応じた教育を仕上げるべきであり、それぞれの教育機関が使命感を明確に持つべきである。
- ・ 小中一貫校や中高一貫校を推進することが、不登校などの教育課題の解決につながっていくのではないか。

- 教育は、学力をつけるだけでなく、ものの考え方、物事への探求心をどう育てていくのかということ。本質的な部分で考えていくと、小・中・高・大と企業をつなげて考えていけないのか。

#### <産業と教育の連携>

- 直接学校に出向き「身だしなみをきちんとする、挨拶の出来る学生が欲しい」とお願いすることにより、挨拶ができる新入社員が入って来て、その新入社員により、会社の風土が変わってくる。企業として、学校できちんと教育がされることを望む。

### 5 社会全体の教育力の向上（学校・家庭・地域との連携含む）

- ・ 「モンスターペアレント」と言われるが、保護者も子育てで大変悩んでいる。要は、学校と保護者の食い違いであり、保護者の悩みを聞きながら語り合うことで、相反する関係ではなく、本当に大事な関係に変わる。
- ・ 保護者の意識の変化やモラルの低下が、掃除をきちんとできない、物を大切にしないなど子どもたちにも影響を与えている。
- ・ 子どもたちの生活面の改善、見直しが非常に重要。子どもたちに対し、中途半端な接し方をせず、真正面から「どうして」「なぜ」をきっちり説明し、正しいことは正しいと伝えなければいけない。
- ・ 生活面での改善は、学校や教員に求めるのではなく、家庭の改善改革が重要。地域の大人の協力も得ながら、子どもに愛情を持って大事に育てることで子どもの精神状態が良くなり、少しの変化が学習意欲の向上につながる。
- ・ 若い世代に対して、人として生きるうえで大事なこと、基本的なことをしっかりと身につけていくために、何を、どう伝えていかなければならないのか考えていかなければならない。
- ・ 温かさや安心感のある親子、家族のつながりの中で、大人も子どもも学ぶ楽しさや喜びを味わう。それぞれの家庭を守り、育てる地域の絆づくりと支え合う地域づくりが必要。
- ・ 生きていくことの楽しさや幸福感は、目標があって、そこに挑戦したり、努力する充実感を知ることであり、まずは大人がその姿を見せることが大事。失敗ができる、失敗を生かす環境を作ることが大事。
- ・ 家庭が協力して補助的な対応があれば家庭学習も進展するが、協力してくれない場合は難しい。企業も含めた学校外の組織の協力が得られたら、進展するのではないのか。
- ・ 秋田県のように、教育力を一層向上していくうえでは、学校と家庭と地域が一体となった取組が大切。
- ・ 家庭で、子どもの得意分野を伸ばしてあげる、気づかせてあげる。コンセプトとして「学校、家庭、地域」が三位一体だということは外せない。例えば、これをどのように仕組みで組み立ていくのか。各々ができる仕組みづくりを考えることが教育振興ではないのか。
- 地域と学校とが連携・協力した教育システムをつくらないと一過性の教育になる。学校外の地域を巻き込んだ学校運営力を高めていくことが必要。

- 県民世論調査における徳島県と高知県との対比によると、高知県では、学力や主体的に判断する力を気にする時期が遅い。こういう意識が、県民だけでなく教員にもあるということであれば、もう少し早い時期から学力や判断能力、個性に力をいれる教育方法を取り入れることにより、伸びる可能性があるのではないかと考える。

## 6 組織的な学校運営の推進

- ・ 学校が、必要なことを明確に整理できていないため、管理職が何から手をつけていいのかわからない。学校は、学力形成と人間形成の2つを柱に整理しないと大事な部分を忘れる。教育をシンプルな部分に整理し、管理職がしっかりと抑え直すことが必要。
- ・ 教員は、様々な課題が出てきているため、どこから手をつけたらいいか悩んでいる。ただ、これは、学校内の課題を明確にして、学校づくりをしていけば解決することも多い。
- ・ 高知県の教員は、基礎基本を徹底的にやらない。みんなで力を合わせたらできるはず。どうしたら合わせる事ができるのか。組織的なところに課題があるのかと考える。
- ・ 授業力は知識だけでは高められない。深い人間性に裏づけされた知識や教育技術を必要とする。教師としての資質を見抜ける採用試験が必要であり、講師経験は大いに活用されるべきである。
- ・ 教員の多忙感を取り除き、授業に専念できる環境をつくるため、学校運営機構の改革や保護者への対応等への工夫が必要。
- ・ 鍋蓋構造では、課題を一人で抱え込んでしまう例が多く見られる。優れた授業、適切な学級運営にはミドルリーダーとして位置づけられた指導者が必要でないか。
- ・ 大規模校の学校運営や、小規模校のきめ細かな指導など、それぞれの良い点を学び合い、活かしていけばいいのではないかと考える。
- ・ 学校教育で大切なのは、学力形成と豊かな心を育む「教育の質の向上」であり、「信頼される学校づくり」。
- ・ 学校全体のスリム化、スクラップをどのようにしていくのか。校務分掌の整理、学校の目的・役割など、トータルとしての目標の明確化。さらには、教員の意識改革。こういうことが組織づくりにつながってくる。
- ・ 組織を動かしてという面では、校長や市町村教育委員会のリーダーシップは非常に大きい。
- 管理職としての姿勢、リーダー制、そのフォローが教員や子どもたちに与える影響は非常に大きい。
- 教育界の一番のアキレス腱は「組織力＝システムづくり」教育関係の色々な組織が、高知県全体の（学力）問題に真剣に取り組むための組織づくりが必要。

## 7 教育の機能強化を図るための体制の充実

- ・ 全国で最も早い高校入試の前期試験により、不合格となった半分の生徒は不安も入り混じり、落ち着かず、先生も教科指導に専念できない状態が生まれているのではないかと考える。

## 8 高知県への人材の定着

- ・ 高知県に留まりたい、就職したいと望んでも難しい。流出することだけを捉えるのではなく、留めさせるためには何が必要かも考えていきたい。
- ・ 県外就職の内定は、県内より2～3ヶ月早い。結局、元気な学生は県外へ出ている。

## 9 計画の策定、推進に対するの注意事項・必要事項

- ・ 目標は抽象的な表現ではなく、県民が理解するようはつきり掲げ、その目標や課題を解決するための取組と優先順位を具体的に提示するなど、関係者が共通イメージを持つことが大切である。
  - ・ 関係者で合意したら、愚直に数年間は取り組むことが必要。学力調査や体力調査等で定点観測をしながら、最初の5年間愚直に取り組んでみてはどうか。
  - ・ 秋田県の「秋田わか杉っ子学びの十か条」のように県民に呼びかけることで、みんなで知恵を出し合うコンセンサスを作っていく必要がある。
  - ・ 秋田県は、「40年間」同じことをやっけてきている。ベーシックな基礎・基本を、愚直に40年積み上げていく。秋田県がなぜ、できたのか、高知県は学ばなければならない。
  - ・ 高知県の小中高の学力や生活の問題は、進学校が私学というところに根があるのではないか。
  - ・ 県立大学だけでなく、高知大学も含めた、高知県の大学教育をどうするかという議論をしなければいけない。
- 目標は、私学・公立学校を合わせた高知県としての目標にすべき。公立は目標に向かって進め、私学は設立趣旨に沿っていけば受け入れる。
- 生活の基本部分ができていない子どもは学力も低いことが多い。生活の基本部分に目を向けて、標語をつくるなどして、はっきりしたものを打ち出すと効果が高いのではないか。それが生きる力につながる。また、学力を上げるのであれば、個人の今の点数より2割増しくらいの明確な数字を提示し、得点を上げる努力するのがいいと思う。